

研究成果報告書（要約版）

平成 29 年度札幌国際大学奨励研究費

「平安時代の国際関係史料の調査
とその翻刻による研究基盤整備
（報告書－要約版）

平成 30 年 3 月

研究実施者 篠崎 敦史（人文学部現代文化学科助教）

研究期間 平成 29 年 6 月 15 日～平成 30 年 3 月 31 日

1、研究の概要

i) 研究目的

本研究は、平成 29 年度札幌国際大学奨励研究に基づき、平成 29 年 6 月 15 日～平成 30 年 3 月 31 日の間、行われたものである。

本研究の目的は、宮内庁書陵部所蔵の『水左記』の自筆本と、東京大学史料編纂所所蔵の『日本運上録』の調査を行い、これ通じて、両史料の翻刻、活字化の前提の作業を実施するとともに、関連する史料の収集と論文作成を行うことにある。

ii) 本研究の着想に至る経緯

本研究の着想に至る経緯と研究開始前の準備状況であるが、研究実施者がかつて

①「高麗王文宗の「医師要請事件」と日本」（『ヒストリア』248、2015 年）

②「10～11 世紀の日宋交渉と入中僧」（『ヒストリア』255、2016 年）

の 2 つの論文を発表した際の事前調査を基礎とする。

①の執筆時、本研究の調査対象の『水左記』自筆本を宮内庁書陵部に調査に行き、②の際は、もう一つの調査対象の『日本運上録』を実見しに行った。しかしいずれの場合も、調査に十分な時間や複写を確保することができなかった。

そのため、本研究でより詳しい調査と、上記目的のための環境整備を行うことが必要と判断し、応募した次第になる。

ii) 研究対象について 1—『水左記』

以下、本研究が対象とした二つの史料—『水左記』と『日本運上録』についての基礎的知見について記述する。なお、下記の知見は基本的に先行研究においている（参考文献は報告書本編を参照のこと）。

『水左記』は、平安中期の公卿、源俊房(1035～1121)の日記である。

本史料の最大の価値は、俊房の自筆本が一部現存していることと同時に、11世紀後半におきた日本と高麗の外交交渉に関わる記述がみえる点にある。これは日本史のみならず、世界史的観点からも極めて希有な史料といえる。とりわけ、高麗の王を「高麗皇帝」と記しており、日本のみならず、当該期高麗がいかなる自尊意識や対日観を持っていたのかをさぐる上で重要な位置にあるものといえる。一方、本史料の問題点としては、『史料大成』が未収録の記事があるという点に求められる。特に前述した高麗との外交に関わる部分は、自筆本にあるにも関わらず、『史料大成』などが翻刻していないものがある。そのため、日麗交渉については刊行されている書籍からではその全容が追えず、自筆本をみななければならない部分が存在しているのである。

調査の前提となる『水左記』の全容であるが、田島公「文庫論」(『岩波講座日本歴史 第22巻 歴史学の現在』所収、2016年、岩波書店)に拠れば、日次記7巻と別記1巻が残存しているとのことである。その内訳であるが、

- ① 康平7年(1064)上・下 一書陵部(伏見宮本)
- ② 承保4年(1077)下 一尊経閣
- ③ 承暦4年(1080)上・下 一書陵部(柳原家本)
- ④ 承暦5年(1081)下 一尊経閣
- ⑤ 永保4年(1084)上 一書陵部(伏見宮本)
- ⑥ 永保4年(1084)別記(正月任大臣大饗)一書陵部・伏見宮

となる。本研究が対象、調査したのは、前述した日麗交渉について記述された「書陵部(宮内庁書陵部)」所蔵本であり、上記の①、③、⑤、⑥となる。

書陵部が所蔵している『水左記』の伝来過程であるが、田島氏によれば、南北朝前期に北朝の持明院統、室町時代前期に伏見宮家が

収蔵していたが（一部は蓮華王院が持っていたそうである）、江戸時代中期から後期にかけて、前田家と柳原家に渡り、現在、書陵部と尊経閣が所蔵するようになったとのことである。特に③の柳原家本は、宮内庁に伝領した経緯に不明な点が残るものの、おそらく1927年に宮内省（名称は当時のもの）の所管になったと推測されている。

iv) 研究対象について 2—『日本運上録』

次に『日本運上録』であるが、これは詳細が不明の史料である。現在のところ、東京大学史料編纂所所蔵の本しか確認されておらず、写本なども含め、「いつ、どこで、誰によって書かれた」など、その書誌学的情報はほぼ皆無である。そのため、これについても東京大学への調査が必須と考え、旅費を予算として要求した。

本史料の重要な点は、11世紀初頭、宋から牒が来たとの記事があり、これを伝える唯一のものであるという点にある。これが平安時代の日宋関係を考える上で貴重な情報であることは間違いがない。一方で、従来、『日本運上録』が詳しく調査されたことがなかった。そのため、これに記された情報がどの程度の信憑性があるのかすら不明で、先にみた11世紀初頭の宋からの牒も、果たして史実なのかどうかも曖昧である。

本研究は以上の知見に基づき、これら重要史料の問題点を解消することを目的とし、実施した。

2、要求した予算額とその用途について

本研究では、下記の予算を札幌国際大学に要求した。その額、残金などの概要は下記になる。なお、下記の詳細については、報告書本編に記載した。

	予算額	支出	残金	備考
旅行交通費	150000円	122760円	27240円	
雑費（アルバイト含む）	38000円	0円	38000円	使用せず
雑費（文献複写費）	50000円	25383円	24617円	
図書費	50000円	31104円	18896円	
合計	288000円	179247円	108753円	

3、研究実施期間の活動と成果について

本研究は、平成29年6月15日～平成30年3月31日実施された。
この期間内の研究活動は、主に下記の三段階になる。

①平成29年6月15日～8月21日—事前準備、関連史料・先行研究の収集

②平成29年8月22日～25日 —東京での調査

③平成29年8月26日～平成30年3月31日—翻刻、学会報告、論文執筆、報告書作成

上記期間の活動の成果は、下記になる。

・論文・・・2本執筆（1つは査読誌に投稿予定）

・学会発表・・・「平清盛・後白河法皇の対宋外交の歴史的位罜（平成30年3月23日）」

なお、末筆ではあるが、本研究の調査に協力していただいた宮内庁書陵部図書寮、東京大学史料編纂所をはじめ、関係各所に厚く御礼申し上げます。

以上